

インターナショナル・スタイル・ハウジングの歴史的評価に関する研究

著者	村上 心, 元岡 展久
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 自然科学篇
号	34
ページ	93-103
発行年	2003
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001289/

インターナショナル・スタイル・ハウジングの 歴史的評価に関する研究

村 上 心 ・ 元 岡 展 久

A Study on Historical Evaluation of International Style Housing

Shin MURAKAMI and Nobuhisa MOTOOKA

序. 研究の背景と目的

20世紀において、世界中に建設された郊外団地の形式を辿っていくと、1920年代から1930年代にかけて西欧に見られた近代住宅建築の実験が基礎になっている。無装飾の白い箱状の建築物、いわゆるインターナショナル・スタイル¹⁾は、国を越えた共通の造形手法として世界中の建築物に広がっていった。その成立過程において決定的とされる作品は、特に1930年前後の戸建住宅、集合住宅に多く現れているのである²⁾。

当時の欧州は好景気下の住宅不足という状況を抱えていた。新たな技術開発の影響の成果とともに、中流階級戸建住宅、低所得者集合住宅の建設ラッシュのなかで様々な実験が行われてきた。これらの作品例をみると、そのテーマとなっているのは、概していえば、「機能に基づく住宅、都市計画」と、「住宅建設の標準化による合理的建設方法」の2点であった。そしてこの問題に対して、新しいスタイルと共にひとつの解決を与えたのが、当時のインターナショナル・スタイル・ハウジングだったのである。

しかし現在、これらの住宅団地に対して様々な問題が生じてきていることも否定できない。当時の生活様式も社会状況も、現在のそれとは大きく異なっている。郊外団地のスラム化、あるいは老朽化した建築物の改修や再生方法の検討といった問題が注目される。つまり、持続可能な都市環境が社会的合意になりつつある状況で、これらの集合住宅がどのように再生するかが大きな問題になっているのである。

20世紀の郊外団地を多角的に評価し、また将来の住宅団地の方向性を見いだすためにも、これらの住宅の変遷を歴史的に整理し検討しておく必要がある。郊外団地がどのように成立してきたのか。どのような意図の元に展開されてきたのか。1960年代の郊外団地群はいかに位置づけられるのか、そして建設後どのような変化を経て現在の状況に至ったのか。といった点である。

本研究においては、各々の時期に重要な集合住宅の作品例を引用しつつ、建設された集合住宅の形式の変遷を辿っていく。そのうえで、集合住宅の成立から展開の過程であられた集合住宅の形式について、時期的な特徴を検討し、体系的に整理することを目的とする。

1. CIAM とインターナショナル・スタイル・ハウジングの成立

近代建築史の中で、もっとも大きな関心を引きつけた建築類型といえば、戸建ならびに集合住宅であったといっても過言ではない。過去の建築史が神殿、教会や宮殿を中心に語られてきたのに対し、近代建築は「住居」の実験の中ではぐくまれてきた。そして近代化は、1920年代以降、主に「都市」との関連で急激に進行していく。1920年～30年代にかけて欧州各地で実施された都市住宅に、近代建築運動の著名な作品が多いのもその証左となる。中でも郊外住宅団地は、各国の先進的な近代建築家にとって、重要かつ早急に解決すべき共通の問題を試すことのできる、最良の実験室だったのである。

具体的な建築作品の影響もさることながら、20年代後半以降の近代建築運動の中で、特にその後の団地の変遷を大きく方向付けた点で、CIAM³⁾がしめる位置は大きい。1928年に結成された CIAM は、その後1956年まで計10回を数えるが、特にその初期の会議において検討された主題をみると、「都市」や「住宅」が焦眉の問題であったことを示している。第2回会議（1929年フランクフルト）では、「低家賃住宅建築計画」がテーマであった。第3回の会議（ブリュッセル）では、「敷地計画の合理的方法」をテーマに、特に連続住宅や高層アパートの住棟配置の方法が議論された。つまり、1920～30年代の先進的な建築家は、集合住宅にその関心を集中させていたのである。

こうした住宅に対する強い関心のあらわれのひとつとして、1927年のワイゼンホフ・ジートルンク⁴⁾が捉えられる。ワイゼンホフ・ジートルンクは、1927年にシュツットガルトで開催された住宅展で、ミース・ファン・デル・ローエによって全体計画がなされた。ル・コルビュジエ、ワルター・グロピウスを含め、近代建築運動を主導していた建築家が参加し、戸建住宅から連続住宅まで様々なタイプの住戸、計33戸が建設された。その後の住宅に与えた影響の大きさからも、最も重要なインターナショナル・スタイル・ハウジングの実験の実施例であった（写真1）。建築史家 G・ギーディオンはこのジートルンクを「手工業的な構築方法から工業化への転換と、新しい生活様式の予告」⁵⁾としてその意義を強調している。それ以前にも、先進的な建築家がそれぞれのアプローチから新たな提案を実施させてきていたが⁶⁾、ワイゼンホフ・ジートルンクは、同一の敷地内に、主要な国際的建築家が、同時に建設するという、特異な状況の中で近代住宅団地が実現されたものであった。ここでもって、国を越えて共通するスタイルとして、いわゆるインターナショナル・スタイルという様式が、一応の完成を見せたともいわれる。

確かに、建設された建物群を見ると、どの建物もいわゆる、ヒッチコックとジョンソンによって定義された「インターナシ

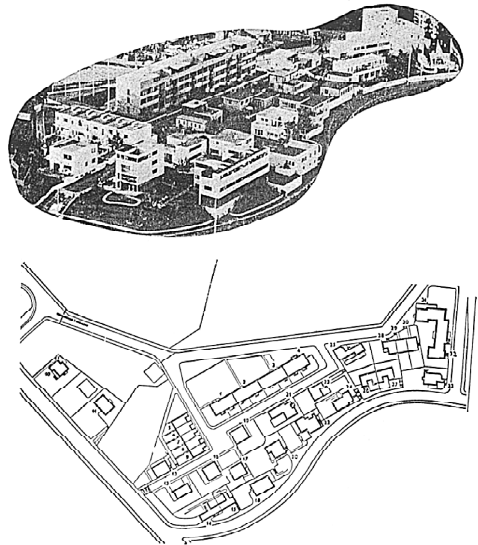


写真1 ワイゼンホフ・ジートルンク

ナル・スタイル」の特徴⁷⁾を示すように思える(写真2)。しかし、様々な世代の建築家によって建てられた作品を詳細に比較してみよう。曲線的な造形を部分的に見せるハンス・シャロウンの作品(写真3)には、表現主義的な意匠を見いだすことができる。また、ミースやコルビュジエに対してペーレンスの作品は、縦長の開口部や、屋上部分のラインの強調といった部分に、またジョセフ・フランクの作品には左右対称の構成に、前近代的な名残を感じることができるのである。

これら様式上の造形手法はさておき、重要なことは、ワイゼンホフ・ジートルンクの実験の中に、その後の団地の展開を予知させるしるしが見いだせることである。ひとつにこの住宅展が単に住戸のみを問題とした展覧会ではなく、団地がひとつの都市的全体性をもって構成されていたことがあげられる(写真1)。もう一点は、いくつかの戸建作品は平面的な広がりをもち田園都市の概念が現れている一方で、ミースの作品には積層と連続による住戸の集密化という、一見逆説的な形式が、ここに共存しているという点である⁸⁾。

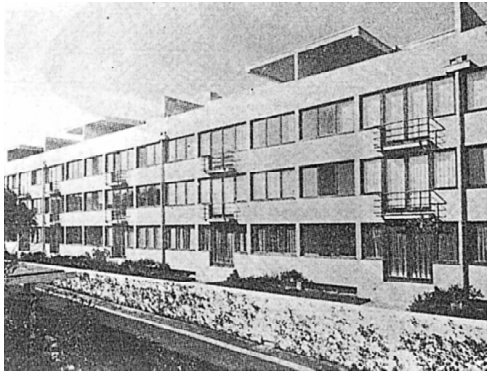


写真2 ワイゼンホフ・ジートルンク。ミース・ファン・デル・ローエによる住棟



写真3 ワイゼンホフ・ジートルンク。ハンス・シャロウンによる住棟

2. 住宅展の展開と成熟

第2回、第3回のCIAMで議論されたことは、結局のところ住宅ならびに都市における「機能主義」と「合理的建設方法」であったと換言できる。この考えは、ワイゼンホフ・ジートルンクの衝撃とも相まって、ヨーロッパ各地に広がり、追従的な住宅展として展開されるにいたる。1927年から1933年だけでも、チェコスロバキア、ドイツ、イタリア、オーストリア、スウェーデンといった各地で13もの住宅展⁹⁾が行われたのである。これらの住宅展のなかで、ワイゼンホフ以外に注目すべきは、チューリッヒのネウブル・ジートルンク(Neubühl siedlung)(1931)¹⁰⁾(写真4)と、プラハに建設されたババ地区(Baba)(1932)(写真5)であろう。前者は、住戸の集密化という実験を引き継ぎ、積層と連続による団地の高密度化がみられる。後者は田園都市のアイデアでテラスと庭をもった高級住宅街へと展開されるのである。

これらのワイゼンホフ・ジートルンクの影響を受けて建設された各国の例について、その実例の詳細な調査研究は、別の機会にゆずる。本章では、こうした住宅展が、インター

ナショナル・スタイル・ハウジングの成立過程においてどのように位置づけられるかという点について、特にプラハのパバ地区と、ワイゼンホフ・ジートルンクの比較を行い、考察する。

ワイゼンホフ・ジートルンクは、国際的な住宅展覧会であり、また当時の国際的に著名な建築家が各国から参加した一大イベントであった。その住宅の集合した展覧会に後の団地を予見する様々な試みがみられていたことは、先述した通りである。ただし、ワイゼンホフ・ジートルンクにおいてインターナショナル・スタイルが確立したといわれるが、未だ十分に成熟していなかった。それゆえ実験的で、作家によって造形の多様性がみられていたのである。対照的に、パバは実験的とはいえない。また、国際的でもない¹¹⁾。ワイゼンホフ（写真1）と比較してパバを見てみると（写真5）複数の建築家が手がけていたにもかかわらず、その造形は極めて画一的であることが確認されよう。そして、実施されなかったとはいえ、計画されていた連続住居（写真6）には、ミースのワイゼンホフにおける連続住居の影響が明らかにみとれる。全体として、ミース、コルビュジエの影響が大きく、白い箱、横長連続窓、といった造形で統一されている。シャロウンの作品に見られたような表現主義的曲線や、ベーレンスの縦長窓といった意匠はみられない。すなわち1927年から33年の間に、インターナショナル・スタイルが様式として一般化したのみならず、近代建築の先進国オランダ、ドイツ、フランスといった国を越えてヨーロッパの各地にまで広がったことを示していたと解釈できる。

インターナショナル・スタイル・ハウジングは当初、低所得者を対象にしたローコスト住宅を大量に供給することであった。それが、パバでは異なる意味合いに変化してきたことにも注目すべきである。第2回のCIAMのテーマが「低家賃住宅建設計画」であったことを思い起こすまでもない。そこには、建設の合理性や、工業製品利用による大量生産化といった実験が繰り返して試されていた。一方で、プラハのパバ地区の住宅展は、豊かな人々がそこに住むことになった。住民のリストを見れば当時著名な芸術家、政治家がそこに名



写真4 チューリッヒのジートルンク

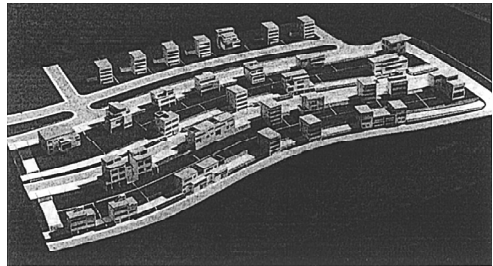


写真5 プラハのパバ地区 模型写真

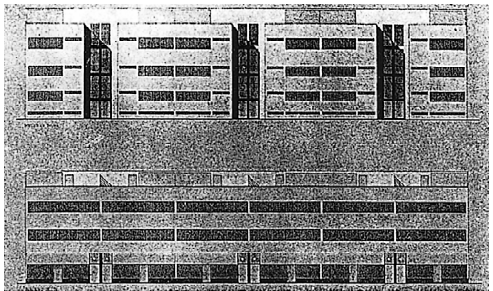


写真6 パバ計画で提案された低層連続住宅の図面写真。Hevlicek and Honzik による案。実現せず

前を連ねる。インターナショナル・スタイルが、いわばファッションにも似た流行として、進歩的知識人の間で受け入れられた。必ずしも、当初の目的とは異なる意味が、インターナショナル・スタイル・ハウジングに与えられた。パバ地区は、ワイゼンホフ・ジートルンクに直接的に影響を受けた住宅展の最後を飾るひとつである。テラスハウス、田園都市、こうした団地の理想が、インターナショナル・スタイルをまとめて現われた、ひとつの（造形的には亜流であったとしても）完成形であった。その後、チェコスロバキアが共産化することで、このパバの住宅地は多くの改変をうけることになるのである。

ドイツで展開されていた住宅展も、ナチスが政権をとるや、インターナショナル・スタイルとは別の方向に向かう。ナチスドイツも団地の建設に力を注いだが、そこでは民族主義的な表現が強くなった。各集合住宅はインターナショナル・スタイルの形式を捨て、伝統的な材料で伝統的な姿を持つようになる。近代建築を押し進めていた建築家達がアメリカに亡命するなど、1940年代以降の団地はまた別の極面にさしかかることになるのである。

3. 構法の工業化

CIAMの実験的活動は、1911年に終結する第1次世界大戦と、1934年のヒトラー総統就任、満州国帝国成立に始まる第2次世界大戦の間の、欧州における社会的余裕の賜物であった。第2次世界大戦中は、欧州主要国における集合住宅の建築は、殆ど見られない。この大戦が終わった1945年には、欧州全域の都市部に深刻な住宅不足が訪れた。これは、戦災による破壊、職を求める人々の大都市への流入、19世紀中頃から20世紀初頭に建築された粗悪な住宅群のスラム化の進行、などを背景としていた。

この状況に対応する為に、欧州各国政府は、大規模な住宅供給プログラムを進めた。例えば、オランダにおいては、地方自治体が公的資金を投入して住宅を建設し、H. A.¹²⁾へ所有・管理権を引き渡すという手法で、大量の公的住宅供給が行われている。しかしながら、建設された戸建住宅・集合住宅の大部分は、19世紀からの伝統的意匠に基づいた低層形式であった。

この時期に注目すべき変化は、構法としてのプレ・ファブリケーション¹³⁾技術の普及である。建築に用いる多種の部品を、工場で製作することにより、品質の安定・コストの削減・時間の短縮・熟練工不足への対応等が図られた。結果、一般的な労働者層に、都市における現代的生活を保障することが可能となった。CIAMが、第2回会議においてテーマとし提唱していたローコスト住宅は、戦争を経験して発展した工業的技術の裏付けを得て、実現をみた訳である。

4. マス・ハウジング期の誕生と展開¹⁴⁾

1952年に完成したル・コルビュジエによるユニテ・ダビタシオンは、彼の理論である高層集合住宅の実例として、再び、都市と住宅の在りように関する議論を、欧州中の建築家達に始めさせる切っ掛けとなった。都市プランナーや建築家の提案をうけて、各国政府は、大都市近郊に高層集合住宅を含むニュータウンの建設を開始した。CIAMの影響が世界中に展開した高層型マスハウジング期¹⁵⁾の始まりである。

ここでは、オランダのビルメミア（Bijlmermeer）団地を対象として、住宅地の変容過程を追跡し、評価を試みる。ビルメミアは、1970年代から90年代にかけて、オランダへ移民してきた人々が最初に生活を始める場所であった。この事実は、職にあぶれた人々がこの街の住民の多くを構成することを意味していた。1968年、フーグールト（Hoogoord）地区に最初の住戸群が完成した当時、アムステルダム郊外の広大な干拓地に、ユートピアが現出するのだとオランダ国民は信じていた。しかしながら、ビルメミアは、数年後、破壊・麻薬・犯罪に溢れたディストピアとなった。これに対して、社会は、団地再生を試みた。この過程を以下に記述する。

ビルメミアは、行政区分としては北オランダ地方・アムステルダム市・南東区に所属する元干拓地である。1966年に着工し、1968年には、リーンブート（K. Rijnbout）設計の最初の住戸群がフーグールト地区に完成した。この設計は、1928年・1933年のCIAM会議におけるラ・サラ（La Sarraz）宣言¹⁶、及びル・コルビュジエの精神である機能都市（Functional City）¹⁷の思想に基づくオープン・スペース（Open space）と高層（High rise）を実現したものであった。ビルメミアの開発計画の特徴は以下の通りである。①動線の分離：歩行者・自転車用道路が地上レベルに用意され、自動車用道路は、もう1レベル上に設定された。この為、地上レベルからは、自動車用道路が土手となって、景観の見通しを妨げる結果となった。②六角形住棟：住棟の中心に、全ての住棟に対して平等なオープン・スペースを設置する為に、住棟は巨大な六角形平面を構成しながら連続している。初期には、24階建住棟が計画されたが、結局11階建（地上9階、地下2階）となった。全ての住棟は、同じ高さ・デザインとされた。オープン・スペースと住棟形状については、羊羹型住棟に比して優れているという意見と、醜いという意見が対立する。住戸寝室数は、1～5室の種類があったが、2～3寝室のプランを有する住戸が殆どであった。均一な住戸について

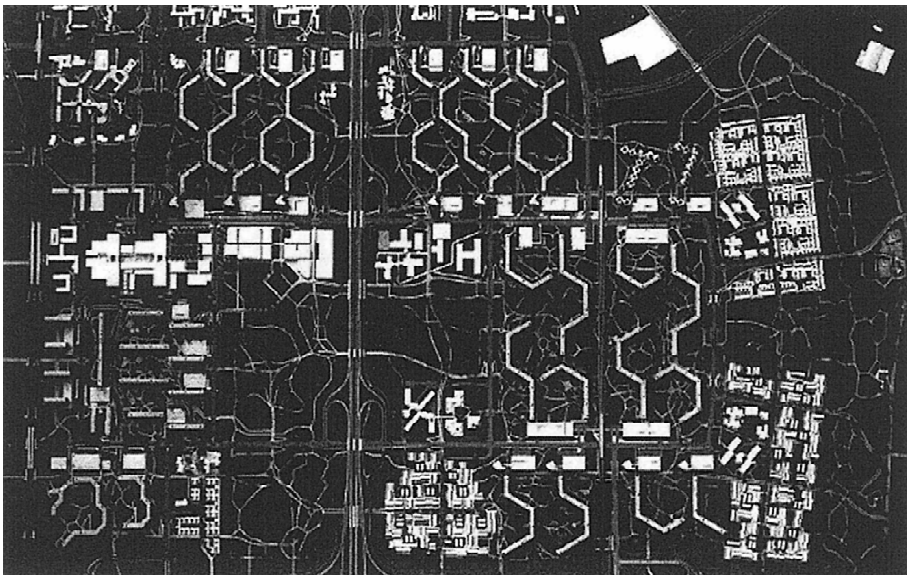


写真7 1970年代のビルメミア

は、結果的に空家増の要因となった。③十分な緑地：敷地の80%が緑地として確保されており、ビルメミア中心部には、大きな公園が計画された。④駐車場：十分な容量の駐車場を設置し、各駐車場と住棟は、屋内通路を通してアクセス可能である。⑤商業施設：1つの大規模商業施設と2つの小さなショッピングセンターを有していた。

建設当時、アムステルダムは深刻な住宅不足に見舞われており、ビルメミアの他にもアルメア (Almeer)、リリシュタット (Lelystad) という低層中心のニュータウンが同時期に計画・建設された。この2つのニュータウンは、低層住宅を中心に計画された点がビルメミアとの大きな計画上の違いであった。元来、白系オランダ人は、居住環境として「独立」「プライバシー」を重視する傾向がある。中流階級の人々はビルメミアではなく他の2つのニュータウンに好んで入居をした。1969年には既に、エレベータが少ないこと、庭が無いこと、インフラストラクチュア（特に地下鉄が開通しないこと等）に住民の不満が表出し、住民代表の抗議ミーティングが行われている。結果的に、ビルメミアは、空室が目立ち（1974年入居率25%）、居住者はグループで居住することを好むアジア人・黒人を主体とし、シングルマザー・同性愛者・失業者で構成される、という状況に至った。

1975年にビルメミア最後の地区の建設が終了した。2×2.5 (km) のエリアを有するビルメミアには、約4万人の人口を収容する12,500戸の住戸が10階建の30住棟に存在していた。同年、オランダの植民地であったスリナムが独立した。これを契機に、オランダ市民権を維持する為、大量のスリナム人がアムステルダムに流入した。アムステルダム近郊でスリナム人達が居住地として選択出来るのはビルメミアしかない状況であった為、新たなスリナム人転居者で一気にビルメミアの人口が増加した。しかしながら、全てのスリナム人達に職が行き渡らなかった為、失業者（1984年失業率40%）と麻薬が溢れることとなった。実際に、政府による賃貸料助成のみが、失業者達がビルメミアに居住することを可能としていたのである。

1972年から継続的に、アムステルダム市はビルメミアのスラム化防止対策を策定した。1982年には、Project Group が設立され、「第1次大規模再生」が始まった。「社会環境の改善及び、家賃の抑制・屋内通路の閉鎖・エレベータ設置・地上レベルの駐車場整備・地上階の住戸化・外構整備・住戸分割・麻薬追放・地区内の商業活動」などを内容とするニュータウン再生計画を提示し、翌1983年には、14に分割されていた地区管理組合を「ニア・アムステルダム (Nier Amsterdam)」1つに統合し、ビルメミア全体での総合的再生に対する意思決定が可能となった。しかしながら、空室率は減少せずニア・アムステルダムは倒産した。当時、住民の70%以上は黒人移民であり、出身国はスリナム・インドネシア・カリブ諸国の旧オランダ植民地、及びガーナが中心であった。

1992年10月4日に、ボーイング747貨物機が団地内に墜落、10階建住棟に衝突し、50人の死者が出るという悲劇にビルメミアは見舞われた。しかし、1992年はビルメミアにおける大規模再生の始まりの年でもある。1990年に、「13千戸の高層住棟住宅の内、25%を取り壊し、20%を転居、50%を大規模再生工事の対象とし、低・中層住戸を新設する」計画が提案され、1992年に、アムステルダム市・南東区・オランダ社会住宅基金は、ビルメミアの抜本的再生「第2次大規模再生」に着手した。この計画は2006年までの期間を予定していた。再生計画の内容は、空間再生（約3,000戸の高層棟住戸の取り壊し、低層住戸の新設、残り的高層住宅の大規模再生工事、分譲住戸の売却等）、社会経済的自立（失業者に仕

事を与えるプログラム、教育向上プログラム等)、環境再生(包括的地域生活環境の向上、主として外構を対象)に分類される。1992年から暫くは、空間再生に対して資金が集中的に投入され、社会経済的再生は、個人への公的な失業補助に頼っていた。1996年には、新しいビルメミアのシンボルとなるアムステルダム・アレナ(Amsterdamse Arena)サッカー場がオープンした。又、同年には、E. C. (ヨーロッパ共同体)による1千万[NLG]:約5億円のビルメミアにおける社会経済的再生への助成プロジェクトが開始された。更に、1999年1月には最終マスタープラン「ビルメミアは私の街」が発表され、それに従ってビルメミア再生は、順調に進行すると同時に、随時見直しが行われている。再生の結果、街のイメージが改善され、中流階級層の流入が始まり、住戸価格及び教育レベルがアムステルダム市平均近くに上昇した。結果として、1980年代には25%以上であった空室率が、2001年時点で7%まで減少した。

1992年に始まる第2次大規模再生計画の策定時には、再生マネージメント及び再生資金が2つの大きなスラム化要因として指摘された。再生マネージメント上の課題としては、①住棟・住戸に多様性がないこと、②維持保全計画・実施がされていないこと、③犯罪、ゴミの散乱、破壊活動があること、④住み手の居住期間が短いこと、⑤住み手流入需要が小さいこと、⑥住み手の収入が低いこと、等が挙げられた。又、再生資金上の課題としては、①マネージメント・コストが高いこと、②メンテナンス・コスト、再生コストが高いこと、③賃料収入が安定しないこと、④1億4千万[NLG](約70億円)の赤字があること、等が指摘された。

これらの指摘の内幾つかの項目が、マス・ハウジング期に建設された先進各国の団地にも当てはまるとするならば、インターナショナル・スタイルに基づき計画された高層型マス・ハウジング期団地は、スラム化への潜在的な可能性を有していると考えられる。

結.

本研究では、CIAMの思想を実現した住宅展が、①従来の住戸内を中心とした住宅計画から、都市を意識した計画へと変化する切っ掛けを提示したこと、②その為の手法として、積層と連続による集密化を提案したこと、③この影響は、欧州各国を始めとする世界中の先進国に及んだこと、④当初想定していた労働者層だけではなく、知識階級に受け入れられ、初期の入居者は後者が中心であったこと、⑤第2次世界大戦後の住宅不足期には、インターナショナル・スタイルの住宅は、構法としてのプレ・ファブリケーション技術の普及を裏付けとして低所得者用住宅として供給対象の変容を遂げたこと、⑥高層化されたマス・ハウジング期の団地は、建設当時は理想とされたものの、低層住宅地に比してスラム化が顕在化し易く、現在の先進各国における住宅ストック環境の維持を考える上で重要な再生対象であること、を明らかにした。

以上の整理を踏まえて、①欧州各地で開催された各住宅展の1次資料を収集し、住宅展の意義を俯瞰することにより、政策的・文化的背景との関連を比較検討すること、②住宅展及びインターナショナル・スタイルの影響を受けた住宅団地の変容と、時代要求・技術変化との関連を観察・評価することにより、20世紀におけるインターナショナル・スタイルの歴史的役割の功罪を評価すること、を今後の課題としたい。

本研究に対しては、平成13年度椋山女学園大学学園研究費(C)の研究助成を頂いた。ここに深く感謝する次第である。

注及び参考文献

- 1) インターナショナル・スタイル International Style, 1932年, ニューヨーク近代美術館で開催された展覧会で, P・ジョンソンと H・ヒッチコックによって提唱された概念。1920年代以降, 国を越えて共通する国際的な建築様式を指す。その美学的原理として, ①ヴォリュームとしての建築, ②規則性, ③装飾忌避, の3点を示した。
- 2) リートフェルトのシュレーダー邸 (1924), ミース・ファン・デル・ローエのチューレントハット邸 (1930), ル・コルビュジエによるガルシュの住宅 (1927), サヴォア邸 (1931), また, 本論で対象としているワイゼンホフ・ジートルンクといった作品がその例である。住宅以外にも, 近代建築における重要な作品はこの時期に多い。
- 3) *Congres International d'Architecture Moderne* (近代建築国際会議) の略。1927年のジュネーブ国際連盟会館設計コンペで, 最優秀賞に該当したル・コルビュジエの案が, 政治的な妨害により拒否された事件を機に, 近代主義の組織化を目的に結成。第1回会議は, 1928年6月, スイスのラ・サラーにあるドウ・マンドロー (de Mandrot) 夫人所有の城館で, 欧州主要建築家が参加して開催された。1956年, 第10回のドゥプロブニク会議で解散。
- 4) 「ジートルンク」は本来ドイツ語で定住地の意味であるが, 特に近代の郊外住宅団地を指す言葉として用いられる。
- 5) ジークフリート・ギーディオン著; 太田実訳『空間時間建築』新版第2版 東京 丸善, 1973-1974, p. 681
- 6) ワイゼンホフ・ジートルンクに先立ち, ル・コルビュジエは, 1926年ボルドー近郊のペサックに約50戸の住宅を建設している。5m×5mの単位を採用し, 大量生産の利点を確保しながら多様性を獲得する住宅計画を実施している。
- 7) 注1) を参照。
- 8) この共存について, 新たな解決策を示したのが, ル・コルビュジエによるユニテ・ダビタシオンであったともいえる。BOUDON, Philippe, *Pessac de Le Corbusier*, Dunod, 1969. (trans. jap., p. 55)
- 9) ワイゼンホフのジートルンクが, Stuttgart で1927に行われたのをはじめとし, 以下, Bruno 1928, Berlin 1928, Karlsruhe 1929, Breslau 1929, Linz 1929 Stockholm 1930, Basel 1930, Zurich 1931, Winterthur 1932, Vienna 1932, Prague 1932, Milan 1933. See, TEMPL, Stephan, *Baba : the Werkbund housing estate Prague*, Basel, 1999, p.16.
- 10) <http://www.neubuehl.ch/siedlung/siedlung.asp> (2002年8月現在)
- 11) ババでチェコスロバキアの建築家でなかったのは, マート・スタム (Mart Stam オランダ) のみであった。
- 12) Housing Association。オランダにおける H. A. は, 1800年代半ばに, 労働運動・宗教団体・市民グループなどが団体構成員の居住環境改善を目的に設立を始めた時期に遡る。1913年までに, オランダ全土で約300の H. A. が設立され, 1923年には約1,300まで増加したが, 殆どの H. A. は管理住戸数十戸の小規模な組織であった。1960年代まで, 地方自治体がイニシアティブをとって住宅を建設し, その後所有管理権を H. A. に引き渡すことが頻繁に行われた。この段階での H. A. の役割の住宅政策上の位置付けは, 主要な住宅供給主体であった地方自治体の補完的なものであった。1960年代に入ると, 政府の道具としてではなく, 「民間の自立性の優先」を実現する組織として H. A. を位置付ける議論が行われた結果, 1965年の居住法の改正で

は、H. A. の強化に向け政策が変更された。H. A. はこれにより、「優先建設権 (First Right Build)」を得ている。この様な権限の強化と共に、各 H. A. は自己のグループだけのための住宅建設はもはや許されず、コミュニティ全体のニーズに応える社会住宅の供給という重要な役割を担うことになった。又、余剰利益の大部分を政府融資の返済にあてなければならぬとされていた義務が廃止され、自己資金をプールし、より強い財政基盤を持てるようになった。更に補助金の投入のほか、民間資金を得ることができるようになり、政府は H. A. の融資保証を行った。以上の様な H. A. の強化により H. A. は専門組織化していった。現在では、欧州各国における中心的住宅供給主体として位置付けられる。

- 13) Pre-fabrication。「前もってつくる」という意。日本におけるプレファブ住宅という呼称は、利用する部品の内、プレ・ファブリケーション（工場生産）率が66.7%以上の住宅生産システムに対して認定される。
- 14) 第4章の資料は、“*De Vernieuwing Halverwege*, Vernieuwing Bijlmermeer, 2000”, “*De Vernieuwing Voltoeien*, Vernieuwing Bijlmermeer, 2000”, “*Archis 1997-3*, Nederlands Architectuurinstituut, 1997”による。
- 15) Mass Housing Period。日本においては、住宅政策の「55年体制」の確立、即ち、住宅金融公庫・公営住宅・公団住宅の3大政策的住宅執行組織が出揃う1955年頃から始まる、「早く・安く・多く」を目的とした住宅の大量供給期を指す。理論的背景は、20世紀前半の欧州を起源とする機能主義に基く近隣住区論である。欧州諸国においては、第一次世界大戦後、日本においては第二次世界大戦後に顕著となる、住宅不足の解決対策として採用され、展開された。欧州における第二次世界大戦後のマス・ハウジング団地は、住棟の高層化によって、大戦前の住宅形式と区分できる。我が国においては、1990年代には、おおよその量的充足を得て「フロー」から「ストック」へと住宅供給の主眼は徐々に転換され、マスハウジング的住宅供給は収束へと向かった。マスハウジング期の実地供給方式としては、数百戸～数千戸規模の「一団地方式」や数千戸～数万戸規模の「ニュータウン方式」が用いられ、羊羹型の集合住宅を中心に建設が行われた。戸建住宅に対しては、持ち家推進政策に基く建売住宅が供給された。
- 16) CIAM 第1回会議において、討議の結果採択された建築・都市の近代化への指標。「アカデミズムや政府からの脱却」「機能主義」「都市計画に必要な住む・働く・楽しむの3要素」などが提言された。
- 17) 1933年にマルセイユ・アテネ等で開催された第4回 CIAM 会議のテーマは、「機能都市 (The Functional City)」であった。34都市の分析を通じて、都市問題解決への提言を「アテネ (Athens) 憲章」として纏めた。「高層住棟」「連続した緑地」等を内容としたこの憲章は、1943年に出版され、第2次世界大戦後には、欧州各国を始めとする先進各国の団地計画に多大な影響を与えた。

写真出典

- 写真1 ジークフリート・ギーディオ著；太田実訳『空間時間建築』新版第2版 東京 丸善，
1973-1974, p. 679
- 写真2 ジークフリート・ギーディオ著；太田実訳『空間時間建築』新版第2版 東京 丸善，
1973-1974, p. 680
- 写真3 波多江健郎氏撮影，<http://www.retec-duplex.co.jp/hatae/apartment/stuttgart/scharoun1.jpg>
(2002年11月現在)
- 写真4 <http://www.neubuehl.ch/siedlung/siedlung.asp> (2002年8月現在)
- 写真5 TEMPL, Stephan, *Baba: the Werkbund housing estate Prague*, Basel, 1999, p. 24
- 写真6 SVACHA, Rostislav, *The Architecture of New Prague 1895-1945*, the MIT Press, Massachusetts,
1995, p. 317
- 写真7 *Archis 1997-3*, Nederlands Architectuurinstituut, 1997

村上（生活科学部 生活環境学科）

元岡（生活科学部 生活環境学科）